

謙澄は日本文化を欧米で紹介したが、反対に欧米文化を明治・大正時代の日本に広く紹介したことも忘れてはならない。

「欧米文化を日本で紹介」

イギリス留学中（1878～1886年／明治11～19年）には、1880～1884年にかけてケンブリッジ大学に学び、バチュラー・オブ・ロー（法学士）、バチュラー・オブ・アーツ（文学士）、マスター・オブ・アーツ（文学修士）の3つの学位を取得した。入学直後からトーマス・グレイやロード・バイロン、パーシー・シェリーなど、イギリス詩人の詩の漢詩訳を試み、1882年にはシェリーの『雲雀の詩』を『錫磊（シェリー）雲雀詩』として出版した。翌年には、古代ギリシャ哲学書『希臘古代哲学一斑』、同じく古代ギリシャの物理学書『希臘古代理学一斑』の2冊を著している。また晩年には帝国学士院の委嘱によって古代ローマの法典（ローマ法）の研究を行い、1913（大正2）年に『ユスチニアヌス帝欽定羅馬法提要』、1915（大正4）年に『ガイウス羅馬法解説』、『ウルピアーヌス羅馬法範』を翻訳・刊行し、この功績で1918（大正7）年6月に法学博士号を取得した。

謙澄が日本に西洋文化を紹介した事例の最たるものは『谷間の姫百合』の出版であろう。イギリス留学後の1888（明治21）年から1890（明治23）年にかけて、イギリスの女流作家バーサ・クレイの小説『ドラ・ソーン』を翻訳、『谷間の姫百合』全4巻として出版した。この小説はベストセラーとなり、時の皇后であった昭憲皇太后も愛読し、謙澄に侍従を通じて順次刊行を催促したとの逸話が残っている。謙澄は翻訳にあたり、漢文直訳体を避け、用語も文体も平易であることを心掛けた。このこともベストセラーにつながった要因と考えられる。



vol.6

文化人
末松謙澄

謙澄の文化面での功績として、『源氏物語』の英訳出版は広く知られているが、このような西洋文学やギリシャ古典学、ローマ法などの学問を翻訳紹介したことは、明治・大正期の文化人らに少なからず影響を与えたと考えられる。ここに郷土が生んだ「知の巨人」たる末松謙澄の一側面をうかがうことができよう。

（文化人末松謙澄を考える会 山口裕平）



『谷間の姫百合』全4巻 ※初版本
（行橋市教育委員会 蔵）